

## <資 料>

# コロナ禍で行われた保育園実習における学生への影響

高橋亮<sup>1)</sup> 最上玲子<sup>1)</sup> 伊東佐由美<sup>1)</sup> 清野純子<sup>2)</sup>

1) 岩手医科大学看護学部看護学科 2) 帝京科学大学医療科学部看護学科

### 要旨

本研究ではコロナ禍で行われた保育園実習における看護学生への影響を明らかにすることを目的に調査を行った。研究対象者は北東北にある保育園で学生指導に関わった保育職であり、「コロナ禍で学生に体験させることができなかったこと」、「コロナ禍で心がけたこと」について自由回答を求めた。その結果、コロナ禍により学生に体験させることができなかったことは、子どもとの関係構築や会話を介したコミュニケーションといった側面の関わりであった。一方、コロナ禍であることで実習指導に心掛けたことは、感染防止対策と様々な制限下ゆえの工夫が挙げられた。コロナ禍の実習では様々なことが制限されている中でも「with コロナ」という視点で「新しい生活様式」を踏まえた学修の機会を得ていることがわかった。今後は様々な制限があっても、実習において学生が子どもと関わるができるような手段や工夫を見出していく必要があると考えられる。

キーワード：新型コロナウイルス感染症，保育園実習，小児看護学

## I. 緒言（はじめに）

2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症の流行により、日本国内においても緊急事態宣言が発令され、多くの実習施設で看護学生の実習受け入れが困難となり問題となった。感染流行地域においては、特に緊急事態宣言下では施設実習が行われなかった看護師養成機関も多かったが、感染者が少ない地域では多少の制限があるものの従来通りの施設実習が可能であった。

保育所等においては、保護者が勤務のため子どもが家に1人であることや、春休みや夏休み等がないなど、休校した学校とは異なりコロナ禍においても引き続き開所していた。保育所等では感染対策を踏まえて、様々な制限の中で保育計画を立案し実践をしていた(村上, 2021)。

コロナ禍以前、看護学生は保育園実習において「健康な子供の成長発達や生活を知るだけでなく、健康障害を持つ子どもや医療的ケアを受ける子どもの支援について学んでいる」ことが報告されており(秋田ら, 2019)、保育園で学ぶ意義は大きい。A大学の看護学科では4年次の統合看護学実習の一環として保育園実習を取り入れ、健康な子どもの成長と発達に関する理

解を深めるとともに、保育学や社会福祉学といった周辺領域の学問と小児看護学を統合して学ぶ機会を設けている。履修者の多くは将来、小児看護に携わりたいと考えている学生や保健師・助産師養成課程の学生が多く、小児看護に対する意識も非常に高い。なお、A大学の実習施設の保育園においてはコロナ禍においても学生の受け入れ制限などの要請はとくになく、感染予防に十分に留意することが課せられただけであった。

このような保育園での実習において、コロナ禍であることが学生の学びにどのような影響を与えたかを検証したので報告する。なお、本調査を実施した地域は感染流行が比較的少ない地域(北東北所在の県)であり、調査実施時期の感染者数は2021年9月～2021年10月時点で3,048人～3,486人で推移した県にある保育園で調査を実施した(厚生労働省, 2024)。

## II. 研究目的

本研究では感染流行が比較的少ない地域(北東北)で行われた保育園実習における学修上の制限や問題、注意点等を実習担当者の回答内容から検討し、学生への影響から今後への課題を明らかにすることを目的に

調査を行った。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 対象者

研究対象者は北東北の私立保育園（1か所）で学生指導に関わった保育職36名のうち調査用紙を提出した21名（回収率：58.3%）。なお、当該保育園においてはA大学以外の学生は受け入れておらず、受け入れ学生数は3名であった。

#### 2. 調査期間

2021年9月～2021年10月（実習期間は2021年9月の2週間）。

#### 3. 調査手続き

研究対象者からは『コロナ禍で学生に体験させることができなかったこと』、『コロナ禍であることで実習指導に心掛けたこと』について調査用紙を用いて自由回答を求めた。

#### 4. 分析方法

分析方法は回答内容を筆者が繰り返し読み、文脈の意味を崩さないようにコード化し、さらに相違性、共通性を検討後、意味が類似したものをまとめてカテゴリー化した。文脈の前後の意味を読み取る際は、文脈の意味を崩さないように簡潔な一文にしたものをデータとした。また、対象者ごとに1つひとつの文脈をコードとし、意味の類似するものを集めてより抽象的なカテゴリーとした分析の過程においては、看護学の質的研究に精通したスーパーバイザーに指導を受け妥当性の確保に努めた。

#### 5. 倫理的配慮

帝京科学大学研究倫理審査委員会による承認を受け実施した（承認番号：21A032）。依頼文書には調査の趣旨、調査への協力は自由意思であり拒否しても不利益を生じないこと、無記名でありプライバシーの保護、調査結果の公表について明記し、調査用紙の提出をもって同意を得たものとした。

なお、対象施設の管理者に対しては本研究の趣旨と意義ならびに用いる調査用紙の説明を行い、職員への負担がないこと、任意の研究協力であること、プライバシーの保護に努めること、調査結果の公表についても書面をもって説明し同意を得た。

### Ⅳ. 結果

#### 1. コロナ禍により学生に体験させることができなかったこと

「コロナ禍により学生に体験させることができなかったこと」は、15コード、2カテゴリーが抽出された。以後、カテゴリーは「」で示す。「子どもとの関係構築」のカテゴリーとして、表情を伝えること、タッチング、他クラスの児との関わりといった回答があった。また、「会話を介した関わり」のカテゴリーとして、会話を楽しみながらの食事介助、保護者との信頼関係構築、声の掛け合いといった回答があった。なお、体験させることに問題はなかったとの回答は12件あった。

表1 コロナ禍により学生に体験させることができなかったこと

カテゴリー	コード
子どもとの関係構築	表情を伝えること (7) タッチング (2) 他クラスの児との関わり
会話を介した関わり	会話を楽しみながらの食事介助 (2) 保護者との信頼関係構築 (2) 声の掛け合い

n=21(複数回答あり)  
( )内の数字はコード数

#### 2. コロナ禍であることで実習指導に心掛けたこと

「コロナ禍であることで実習指導に心掛けたこと」では、「感染防止対策」として手指消毒、体調管理等の回答があった。手指消毒、手洗い、児の鼻汁や涎、おもちゃの消毒、グローブの着用、部屋の換気、密にならないようにする、歯磨きの援助、体調管理といった回答があった。

「制限下ゆえの工夫」としてマスク越しの目元の動き、できるだけ遊べるよう促すといった回答があった。

表2 コロナ禍であることで実習指導に心掛けたこと

カテゴリー	コード
感染防止対策	手指消毒 (5) 手洗い (5) 児の鼻汁や涎 (4) おもちゃの消毒 (2) グローブの着用 部屋の換気 密にならないようにする 歯磨きの援助 体調管理
制限下ゆえの工夫	マスク越しの目元の動き できるだけ遊べるように促す

n=21(複数回答あり)  
( )内の数字はコード数

## V. 考察

本研究の目的は、看護学生に対する保育園実習の学修上の制限や問題、注意点等を実習担当者の回答内容から検討し、学生への影響および今後への課題を明らかにすることであった。

コロナ禍により学生に体験させることができなかつたことにおいて、第1カテゴリーである「子どもとの関係構築」で最も多かったのは「表情を伝えること」であり、実習中はマスクを着用することで学生が表情から感情を伝えることができなく子どもとのコミュニケーションを十分に図ることができなかつたことが明らかとなった。また、「タッチング」といった子どもと直に関わる機会も十分に経験することができない現状もあり、これは児との関係構築だけではなく児の発達の学びなどの機会を十分に得ることができないなどの弊害もあったと推測できる。さらに、他クラスの児との関わりができなかつたとの回答からは学生が担当したクラス以外の発達段階にある子どもの成長発達を学ぶ機会が得られなかつたという問題があったこともわかつた。

第2カテゴリーである「会話を介した関わり」では、「会話を楽しみながらの食事介助」が挙げられており、学生の関わりが単純な食事介助に留まり、本来であれば児と食べ物の話しなどで楽しいひと時を経験することができなかつたと推測される。さらに児との「声の掛け合い」もできなかつたことから、感染対策の観点からコミュニケーションに関する内容を十分に体験できなかつたことが明らかとなった。また、「保護者との信頼関係構築」が挙げられたことは、保護者とのコミュニケーションを図ることができなかつたことを示す。単に家族との関わり方について学ぶ機会がなくなっただけでなく、児と保護者との会話や親子関係の観察などの側面からの学びを得ることができなくなつたことを示唆する。

なお、体験させることに問題はなかつたとの回答が12件あつたことについては、実習を担当した保育職12名が感染防止対策を施しながらも、学生の学びに影響がないよう十分な配慮をしていた結果であると推測される。本研究の対象地域が北東北で比較的感染拡大を免れていたという地域特性だけではなく、実習担当者の努力と工夫を重ねて実習指導を行い、子どもの成長発達の学びの修得に影響がないように指導ならびに保育業務を遂行していたと考えられる。

次に、「コロナ禍であることで実習指導に心掛けた

こと」では第1カテゴリーに「感染防止対策」が挙げられ、実習担当者は感染症対策を最優先に考えていたことが明らかとなった。感染症流行地域で保育所実習を行った学生を対象とした先行研究では学生の感想として感染症対策を行っていたことが強く印象に残っていたとの報告もあり（徳島ら, 2022）、本結果も同様の状況であることが明らかとなった。第2カテゴリーの「制限下ゆえの工夫」として、「マスク越しでの目元の動き」のようにマスク着用を前提に子どもと関わる「With コロナ」での工夫を学ぶ機会にもなつていたことも明らかになった。さらに「できるだけ遊ぶ」はコロナ禍で制限されているからこそ、あえて遊びの実践を強調したという実習担当者の姿勢もあつた。コロナ禍においては、児の遊びはゲームなどスクリーン・タイムが増える傾向にあるといわれており（King et al., 2020）、とくに活動的な遊びを重要視することの意義も報告されている中で（Dunton et al., 2020）、実習担当者が遊びの援助を積極的に行い、看護学生が子どもとの遊びを多く経験することができた意義は大きい。コロナ禍の実習では様々なことが制限されている中でも「With コロナ」という視点で「新しい生活様式」を踏まえた学修の機会を得て、同時に子どもの遊びがコロナ禍の影響を及ぼすことがないように、あえて遊びの援助に注力していたことが明らかとなった。

小児看護学実習を学内実習としたことでの弊害として、学生から実際に児と関わってみたかつたなどの意見があつたとの報告もあり（岩佐, 2021）、保育施設の徹底した感染症対策の下に看護学生が臨地で実習を行い子どもと関わる機会を実際に得ることができていたという意義は大きい。核家族化や少子化が進み看護学生が日常的に子どもと関わる機会が少なくなつてきている現代の我が国において、コロナ禍による様々な制限が続く状況下にあつても子どもと関わるができるような手段や工夫を、実習施設側からだけでなく教育機関側からも見出していく必要があると考えられる。

本研究の課題として、研究対象者が同一の保育園に所属し、対象者数が少ない点から、本研究の知見を一般化するには限界がある。また、実習担当者からの回答からの検証だけでなく、学生側からの回答と合わせて双方向性の検証も必要であつたと考えられる。今後は、対象者数を増やし、また学生からの回答も求めて、横断的かつ縦断的に調査を行うことが必要であろう。

## VI. 結論

コロナ禍において受け入れ側の「感染防止対策」と「制限下ゆえの工夫」への配慮のもと、保育園で実習し子どもと関わる機会を得られた意義は大きく、「Withコロナ」という視点で「新しい生活様式」を踏まえた学修の機会を得ていた。

しかし、以下について影響を受けざるをえず、改善策や工夫は実習施設側からだけでなく教育機関側からも見出していく必要がある。

1. 学生が、表情を用いた子どもとのコミュニケーションを十分図ることができなくなった
2. 子どもとのタッチングが減少し、接する子どもの範囲も制限された
3. 保護者と関わりが持ちにくくなった
4. 1～3により、子どもの成長発達や家族との関わりについて学ぶ機会が減った

## 謝辞

本研究にご協力頂きました皆様に心から感謝申し上げます。

## 利益相反の開示

本研究において開示すべき利益相反はありません。  
なお、本論文の一部は、第42回日本看護科学学会学術集会において発表した。

## 引用文献

- 秋田由美, 高橋泉, 弓気田美香, 他 (2019) : 小児病棟以外での小児看護学実習に関する文献研究, 駒沢女子大学研究紀要【人間健康学部・看護学部編】, 2, 105-114.
- Dunton, G.F., Do, B.& Wang, S.D. (2020) : Early effects of the COVID-19 pandemic on physical activity and sedentary behavior in children living in the U. S. , BMC Public Health 20, 1351, doi: 10.1186/s12889-020-09429-3.
- 岩佐有子 (2021) : コロナ禍における小児看護学実習の成果と課題, 京都看護大学紀要, 5, 67-75.
- King, D.L., Delfabbro, P.H., Billieux, J.& Potenza, M.N. (2020) : Problematic online gaming and the COVID-19 pandemic. Journal of Behavioral Addictions, 9 (2), 184-186, doi: 10.1556/2006.2020.00016.
- 厚生労働省 (2024) : データからわかるー新型コロナウイルス感染症情報ー陽性者数 (累積), Retrieved from : <https://covid19.mhlw.go.jp/extensions/public/index.html> (検索日 : 2024年1月8日)
- 村上知子 (2021) : コロナ禍の保育計画ー子どもの遊びに着目してー, 金城紀要, 45, 69-75.
- 徳島佐由美, 安井渚 (2022) : 新型コロナウイルス感染拡大下にある小児看護学における保育園実習の検討, 森ノ宮医療大学紀要, 16, 47-55.

(受付年月日 : 2023年9月25日, 受理年月日 : 2024年1月9日)

## < Material >

# Influence of Nursery Practice for Students During the Covid-19 Pandemic

Ryo Takahashi <sup>1)</sup> Reiko Mogami <sup>1)</sup> Sayumi Ito <sup>1)</sup> Junko Seino <sup>2)</sup>

1) School of Nursing, Iwate Medical University

2) Department of Nursing, Teikyo University of Science

**Key words** : Coronavirus disease 2019 (covid-19), Nursery practice, Pediatric nursing